



開館50周年記念  
The 50th Year of the  
Sompo Museum of Art

# 山口華楊展

*Yamaguchi Kayo*  
A Retrospective 2026.7.11 sat.—8.30 sun.



SOMPO美術館  
Sompo Museum of Art



東京で、27年ぶりの回顧展。

PRESS RELEASE

日本画家・山口華楊(1899-1984)は、西村五雲(1877-1938)に入門後、京都市立絵画専門学校に入学。主に動物を主題とした作品で頭角を現します。五雲の亡き後は画塾・研究団体である晨鳥社を再興し、京都画壇を代表する画家の一人となりました。本展では、当館が収蔵する華楊の代表作3点を中心として、初期から晩年までの画業を通覧します。京都ではなじみの深い華楊ですが、東京では27年ぶりの回顧展です。

#### 作家略歴

山口華楊は、京都の友禅職人の家に生まれました。1912年、西村五雲に入門し、17歳で文展に初入選。以後、官展を中心に展覧会への出品を重ねます。五雲が没した1938年に晨鳥社を再興。1943年、海軍省派遣画家としてジャワ方面に従軍。戦後は日展と晨鳥社展を主たる発表の場としました。1981年、文化勲章を受章。1982年にはチェルヌスキ美術館(パリ)で個展が開催され、「偉大なる現代の動物画家」と評価されました。

#### 広報用画像 1



《げんげ幻化》 1979年 紙本彩色 155.7×171.1cm SOMPO美術館

華楊は、狐を「人を化かす」ずる賢い動物ではなく、気品ある存在としてとらえているという。晩年には好んで画題とした。幻化とは仏教用語で、「すべてのものに実体はない」という意味。幻の中に遊ぶかのような2匹の狐が織り成す、細やかで奥行き深い空間表現は、写生を常に重んじた画業の集大成といえよう。

# 展覧会の見どころ

## 1

### 東京で27年ぶりの回顧展

山口華楊は京都画壇を語るうえで欠かせない存在ですが、1999年の銀座松屋を最後に、東京では回顧展が行われてきませんでした。東京で華楊芸術の魅力を味わう、またとない機会です。

## 2

### 親しみやすい動物画

華楊といえば、動物画。犬や鹿、牛、狐、ライオンなど、さまざまな動物たちを描いた作品が集合します。夏休み企画として、幅広い世代が楽しめる場を演出します。

## 3

### 当館収蔵作品の一挙公開

当館は、華楊の初期・中期・後期を代表する作品を収蔵しています。豊かな生命感をたたえた《葉桜》、洗練された技術が光る《猿》、画業の集大成である《幻化》——これら3点を6年ぶりに一挙公開します。

# 展示構成

## 1 章 初期作品

## 2 章 系譜——師・五雲から華楊へ

コラム1 憩う動物——「かわいい」の理由

## 3 章 探究——植物表現の生命力

コラム2 ちいさな仕事——下絵やスケッチとともに

## 4 章 大成——「偉大なる動物画家」として

# 1 章

## 初期作品

1912年、山口華楊は12歳で西村五雲に入門します。厳しい指導のもとで、写生を基礎から学びます。17歳のとき、《日午》(1916年)により、第10回文展に初入選。若くして頭角を現しました。五雲のすすめで竹内栖鳳(1864-1942)からの教えも受けつつ、官展に入選を重ねます。《鹿》(1927年)で第8回帝展の特選を受賞。五雲からも、課題点の指摘はありつつも評価されました。

初期作品は、たしかな写生の技術に裏打ちされた力強いエネルギーを特徴としています。当館が収蔵する《葉桜》(1921年)をはじめ、その技術と表現力の片鱗をうかがうことができる作品を展示します。

### 広報用画像 2



《葉桜》 1921年 絹本彩色 167.4×271.5cm SOMPO美術館

画面全体を覆う青々した葉桜には、生命力がみなぎる。画面下の方には蛇が描き込まれているが、これは知恩院近くで見かけた蛇をもとにしている。その場でつかまえて、自室に持ち帰って写生したと作家本人が回想している。鱗の1枚まで細やかに描かれ、早熟な技量が存分に発揮されている。



## 2章

### 系譜——師・五雲から華楊へ

1938年、華楊の師である西村五雲が没し、晨鳥社は一度解散します。精神的な支柱を失うほどの衝撃を受けたという華楊は、遺作展を開催するために奔走します。それとともに、塾生の後押しを受け、同年に晨鳥社を再興。晨鳥社は、五雲が門人を指導する画塾から、上下関係を定めない研究団体へと生まれ変わりました。

このころの華楊の課題は、五雲の姿勢を受け継ぎつつ、いかに独自性を追求していくかにあったといえます。五雲の描く動物画には厳格さがありますが、一方で華楊が表す動物には作家の慈しみの情が反映されているようです。五雲亡き後に新たな展開をみせる画境を紹介します。

#### 広報用画像 3



《犢》<sup>こうし</sup> 1941年 紙本彩色 143.2 × 157.3cm 京都市立芸術大学芸術資料館

華楊らによって再興された晨鳥社の第1回展に出品した作品。生前の五雲は、絵の題材とするため仔牛を飼っていた。本作は、五雲が没する前年に発表した《麦秋》(1937年)を意識した可能性が指摘されているが、華楊の仔牛は五雲のそれとは対照的に目はうつろで足元がおぼつかなくみえる。背景は抽象的にぼかされ、新たな画風の展開を示す。

広報用画像 4



《制空》 1944年 紙本彩色 186.5 × 129.0cm 名都美術館

文部省戦時特別美術展への出品作。華楊は1943年に海軍省派遣画家としてジャワ経由でアンボン島へ渡り、《基地に於ける整備作業》(1943年)を制作。ここで軍用機の整備作業に取材していたことから、本作もその延長で制作されたものと考えることができる。戦時下の緊迫した心情を絵に託したつもりだったという。

## 憩う動物——「かわいい」の理由

日本画の動物は、しばしば「かわいい」と形容されます。ひと筆で即興的に描いたかのような「ゆるさ」、丸みをおびた形にやわらかい色彩、動物のこどもなど。この特集では、動物たちが憩う姿や休む姿を通じて、「かわいい」の理由を探ります。

俯瞰的な視点でとらえられた犬、生まれてまもない仔馬、雪どけを待つうさぎなど、華楊の動物画においても「かわいい」はさまざまです。

### 広報用画像 5



《日向》1949年 紙本彩色 130.0 × 116.5cm 京都国立近代美術館

タイル張りのモダンで明るい空間に、犬が4匹。動物園や公園、山や寺院などに取材することが多かった華楊としては珍しい主題である。迷いのない細い線で平面的に形がとらえられており、写実性よりは、空間における調和に重きが置かれているようだ。犬は親子だろうか。丸みをおびたフォルムとくつろぐ姿が愛らしい。

# 3 章

## 探究 —— 植物表現の生命力

「動物画家」としての地位を確立した華楊ですが、植物の表現にもその特徴が凝縮されています。もともと華楊は花鳥画家とみずからを認識しており、いわば動物画家である以前に花鳥画家なのです。したがって、若くして植物の描写に長けていました。そのことは、《葉桜》(1921年)にも端的に表れているでしょう。

円熟を迎えた華楊の作品は、背景の抽象化が進み、動物は静かな佇まい<sup>たたず</sup>をみせます。一方で、最晩年の代表作《幻化》(1979年)にも表れているように、植物が画面に登場すると、ひときわ強い存在感をもちます。本章では、今にも動き出しそうな生命感をたたえた植物を描いた作品を展観します。

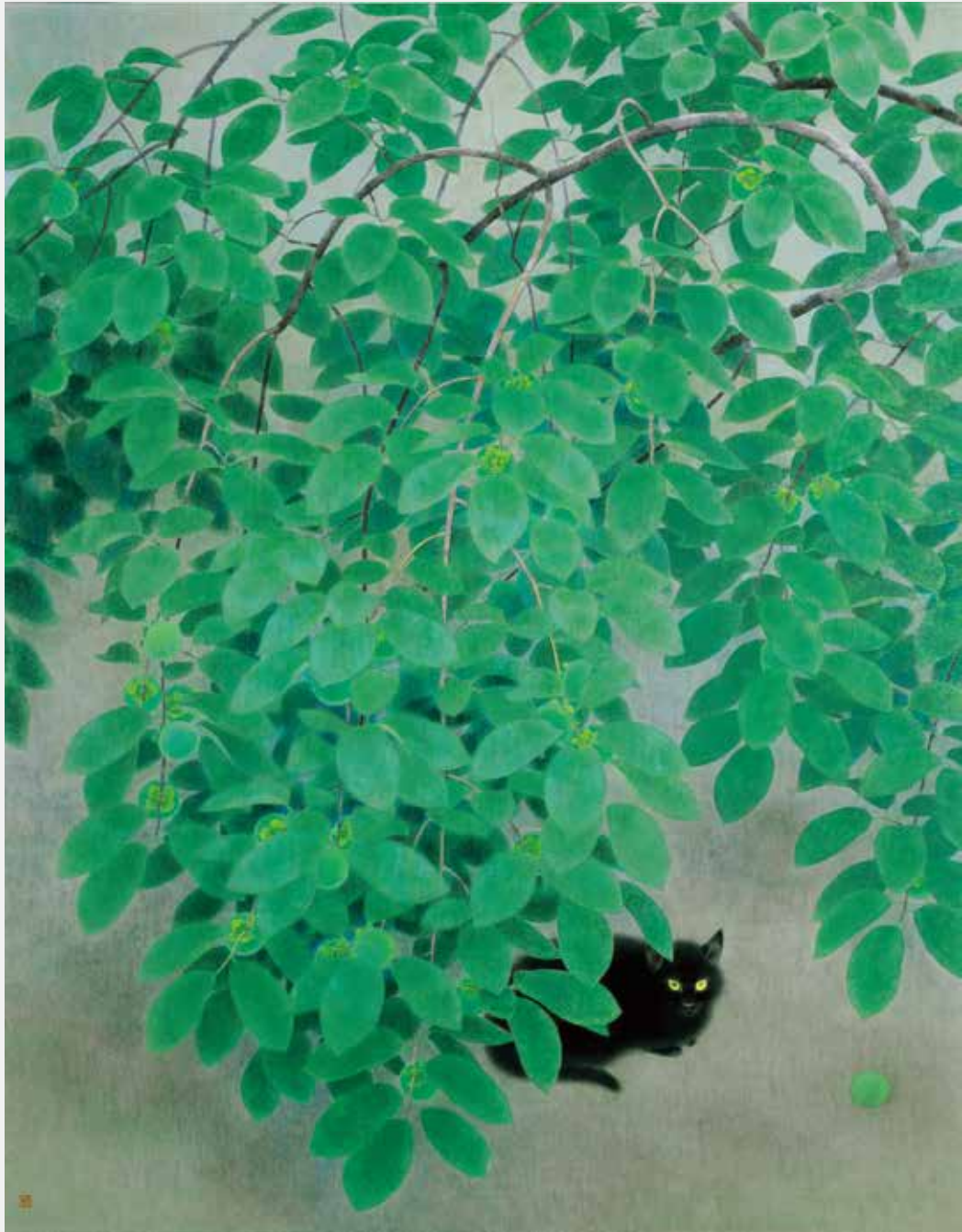


広報用画像 6

花卉を落とし、種をたくわえたひまわりは、露に濡れてうなだれる。背景は抽象化されているが、湿った空気がつぶさに感じ取れるようだ。後景の花はきれいに咲いており、前景とのコントラストを引き立てている。画面奥からは鶏頭<sup>けいとう</sup>が勢いよく伸びており、夏から秋への季節のうつろいを明快に表現している。

はくろ  
《白露》 1974年 紙本彩色 178.0 × 141.6cm 京都国立近代美術館

広報用画像 7



《青柿》 1978年 紙本彩色 178.0 × 140.0cm 北澤美術館 ©Kitazawa Museum of Art

画面全体を青々とした葉が覆うさまは《葉桜》(1921年)にも通じるが、本作はさらに様式化が試みられ、奥行き深い画面づくりへの意識が認められる。黒猫の描き込みも、空間のバランスとして絶妙である。猫の近くに落ちている柿の実は下絵の段階ですでに描き込まれており、構想の入念さをうかがわせる。

## ちいさな仕事——下絵やスケッチとともに

本展では、主に官展をはじめとする展覧会への出品作(大作)を紹介しています。これらの大作の一方で、小品の中にも充実した表現を見てとることができます。

花鳥画家として、繊細な表情をもつ花や、簡明にとらえられた鳥には、華楊の細やかな感性が端的に表れています。

この特集では、小さく凝縮された美を、数々の下絵やスケッチ類とともにたどります。

高島屋の委嘱<sup>いしよ</sup>で制作された扇子の原画。描かれているのはエンゼルフィッシュだろうか。日本の動植物に題材を多くとった華楊には異色の主題だが、扇子という固有の形式との調和が美しく、お中元の季節感にも合っている。2匹を交差させ、画面の右を広く空けていることで、いきいきした動きの効果をあげている。



広報用画像 8

《南海魚》 1967年 紙本彩色 20.5 × 44.0cm 高島屋史料館

広報用画像 9



### 《小下絵貼り交ぜ屏風》

1947-81年頃 紙、鉛筆、色鉛筆、パステル、顔料ほか 169.0 × 370.2cm 京都国立近代美術館

華楊は膨大な写生と研究に基づき、入念に作品を仕上げた。そのため洗練され、要素に過剰さがない。この屏風に貼り込まれた下絵類には、その研究の跡が克明に示されている。小下絵の時点で、すでに構想が完成作に近いことがわかる。本展に出品される本画の下絵も多数含まれているので、注目いただきたい。

## 4 章

# 大成——「偉大なる動物画家」として

戦後の華楊は、日展と晨鳥社展を中心に、作品の発表を続けます。第11回日展に《仔馬》(1955年)を出品し、翌年に本作で日本芸術院賞を受賞します。1971年、日本芸術院会員に任命され、1975年に日展の顧問となります。最晩年の1981年に文化勲章を受章。翌年にはパリのチュルヌスキ美術館での個展に招待され、「偉大なる動物画家」として高く評価されました。

終生、華楊は写生を重んじました。そのうえで表現はシンプルに洗練され、《幻化》(1979年)に代表される幻想的な境地へ至りました。

五雲に入門したのが1912年。そして1984年に没するまでの約70年にわたって、精力的な制作活動を行いました。その画業の円熟から大成にいたるまでの道のりをたどります。



広報用画像 10

京都・嵐山<sup>しほう</sup>の支峰である岩田山の猿をモデルとしている。さまざまな姿勢で描き分けられた猿が、研究の量と深さを示す。構図にも簡潔さのうちに抑揚があり、緊張感よりも温かみが表れている。猿は華楊も飼っていた時期があり、よくなついていたが、誤って引っかけられたこともあるという。

《猿》 1959年 紙本彩色 146.5 × 116.0cm SOMPO美術館



広報用画像 11

堂々とした風格のライオンを、やや俯瞰した構図でとらえている。華楊は膨大な量の写生を基本としつつ、制作の補助として粘土の模型を作り、角度を変えてみながら描くことがあった。本作も、その成果が表れたものと考えられる。母校である京都市立格致小学校に作家自ら寄贈した作品。

《凝視》 1962年 紙本彩色 167.0 × 133.0cm 京都市立格致小学校旧蔵（京都市学校歴史博物館管理）

広報用画像 12



《<sup>しゅうせい</sup>秋晴》 1976年 紙本彩色 50.5 × 73.5cm 北澤美術館 ©Kitazawa Museum of Art

# 会期中のイベント

内容の詳細は美術館ホームページをご確認ください

---

## 学芸員のギャラリートーク【要申込】

本展担当学芸員が展覧会の見どころや出品作品について展示室で解説します  
(専用イヤホンを使用)

---

開催日時および申込期間

7月24日(金) ①14:00-14:40 ②18:00-18:40

申込期間 6月24日(水)-6月26日(金)

8月7日(金) ①14:00-14:40 ②18:00-18:40

申込期間 7月7日(火)-7月9日(木)

---

定員	各回25名(抽選)
申込方法	web申込/美術館ホームページからご応募ください
参加費	2,200円(税込) ・ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

---

## ふあみりー★で★とーく・あーと【要申込】

8月17日(月) 9:30-11:30

休館日に貸し切りの美術館で、ボランティアガイドと話しをしてみませんか?  
作品解説を聞くのではなく、参加者が作品を見て、感じて、思うことを話しながら  
楽しむ参加型の作品鑑賞会です

定員	50名(先着順)
申込方法	web申込/7月10日(金) 10:00より美術館ホームページにて受付開始
参加費	1,600円(税込) ・高校生以下無料 ・ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

---

# 収蔵品コーナー

フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》

# 開催概要

## 開館50周年記念 山口華楊展

The 50<sup>th</sup> Year of the Sompo Museum of Art  
Yamaguchi Kayo: A Retrospective

会期	2026年7月11日(土)ー 8月30日(日)
会場	SOMPO美術館 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1 新宿駅西口より徒歩5分
休館日	月曜日(ただし7/20は開館)、7/21
開館時間	10:00-18:00(金曜日は20:00まで) ※最終入場は閉館30分前まで
主催	SOMPO美術館、毎日新聞社
特別協賛	SOMPOホールディングス
特別協力	損保ジャパン
後援	新宿区、TOKYO MX
観覧料(税込)	年齢は入場時点 一般(26歳以上)／事前購入券1,500円、当日券1,600円 25歳以下／事前購入券1,000円、当日券1,100円 高校生以下無料 身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳(ミライロIDも可)をご提示のご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳をご提示の方はご本人のみ無料 ・25歳以下の方は生年月日が確認できるものをご提示ください

---

### お得なペアチケット(2枚セット券) 2,800円 枚数限定

- 販売期間は6月11日(木)10:00から7月10日(金)23:59まで
- 美術館受付では販売いたしません

- 
- ・事前購入券は6月11日(木)10:00から販売開始
  - ・各種購入方法の詳細は美術館ホームページをご確認ください

URL <https://www.sompo-museum.org/>

プレスお問合せ 「山口華楊展」 広報事務局(ウインダム内)  
e-mail: sompo-m-pr@windam.co.jp  
TEL. 03-6661-9447 FAX. 03-3664-3833  
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-11 鴨下ビル2階